

新聞4コマ漫画が描く野田佳彦首相（中編-2） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2011～2012

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 3): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2011-2012

水野 剛也
Takeya MIZUNO

はじめに 前編・中編-1の要約と中編-2のねらい

本論文は、野田佳彦首相の在任期間中（2011年9月2日～2012年12月26日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前々号（第56巻・第2号、2019年3月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

それをふまえ、本誌前号（第57巻・第1号、2019年12月）に掲載した中編-1では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）を質的に分析した。

本号に掲載する中編-2では、『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）と「オフィス ケン太」（夕刊）、そして『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）を同じ方法で分析する。

本誌次号（第58巻・第1号）以降に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同一の手法で分析する。

その後につづく結論では、それまでの分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前々号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前々号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く野田首相

- ・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』(朝刊) 本誌前号 (中編-1) に掲載。
- ・ウチの場合は (森下裕美) 『毎日新聞』(夕刊)

・コボちゃん (植田まさし) 『読売新聞』(朝刊)

『読売新聞』の朝刊で1982年4月から連載されている「コボちゃん」(植田まさし)は、主人公一家の日常生活を描きわめて家庭的な4コマ漫画である。連載8,000回を機に2004年12月1日号から(一部地域除く)全国紙の4コマ漫画としてはじめてカラー化され、2010年6月14日号で連載1万回に到達した。2012年4月には連載30周年を迎え、本論文執筆時点(2019年12月)でも1万3,300回を超えてなお継続中である。

「コボちゃん」に登場する主要人物は、小学生の主人公・コボ(田畑小穂)とその家族、会社員の父親・耕二、専業主婦の母親・早苗、妹・ミホ(実穂)、祖父・山川岩男、祖母・ミネ、それに親戚の大森竹男である。飼い猫のミーと犬のポチもしばしば家族の一員のように登場する。一家は東京都の私鉄沿線に居住している。「コボちゃん」は作者の幼少時代の愛称であるという。なお、コボの妹・ミホは上述の連載1万回目の作品(2010年6月14日号)で誕生し、名前は公募で集まった候補のなかから作者が選んだ。ミホの誕生と成長にともない、連載開始当初より5歳に設定されていたコボも「たんぼほ幼稚園」を卒園し、2011年4月に「みどり小学校」に入学している。²³

作者の植田まさし(本名・植田正通)は、とくにサラリーマンむけの4コマ漫画を得意とする漫画家で、その活躍ぶりは「彼の作品が人気を博し、その結果として4コマ漫画専門雑誌が刊行され[るなど]4コマ漫画における革命児」と評されるほどである。植田は1947年に東京都世田谷区に生まれ、香川県で育った。1969年に中央大学を卒業後、1971年に「ちゃんぼ君」(『週刊漫画 TIMES』)でデビューした。以来、4コマ漫画を中心に執筆活動をつづけている。その他の代表作として、「かりあげクン」(『漫画アクション』など)、「フリテンくん」(『月刊まんがライフ』など)、「のんき君」(『週刊漫画 TIMES』)、などがある。「コボちゃん」と「かりあげクン」はテレビアニメ化、「フリテンくん」は映画化、「のんき君」はドラマ化されている。主な受賞歴に、第28回文藝春秋漫画賞(1982年)、「コボちゃん」で受賞した第28回日本漫画家協会賞優秀賞(1999年)、第45回日本漫画家協会賞大賞(2016年)がある。²⁴

作品の分析に移ると、「コボちゃん」はきわめて政治色の薄い「純家庭的4コマ漫画」で、野田の在任期間中に首相を描いた作品は1本(468本中1本)しかなかった。『毎日新聞』(夕刊)の「ウチの場合は」(376本中0本)、同じ『読売新聞』(夕刊)の「オフィス ケン太」(71本中0本)、『朝日新聞』(朝刊)の「ののちゃん」(468本中0本)と同様、政治家や政治問題とはほぼ無縁の典型的な家庭漫画であることがわかる。連載1万回を達成した際に作者を紹介した『読売新聞』の記事も、「コボちゃん」を「家庭漫画」と特徴づけている。²⁵

首相を登場させることがほとんどないという点では、少なくとも小泉政権時から「コボちゃん」の

「純家庭的」な作風はほぼ一貫している。先行研究によれば、5年5ヵ月間に及んだ在任期間中に小泉純一郎を描いた作品は1,922本中1本（0.05%）だけで、その後もほぼ変わらず、安倍晋三（第1次、以下略）は356本中0本、福田康夫は355本中1本（0.28%）、麻生太郎は347本中0本、小泉以降の首相で「もっとも描かれやすい」鳩山由紀夫でさえ259本中0本、菅直人も441本中0本、と頻度はゼロかきわめて低いままである。小泉から野田までの11年8ヵ月間を通じて、本論文の定義に合致する方法で首相を描いた作品はわずか3本しかない。しかも、その3本とも（野田を描いた1本は後述）政治的な批評性・風刺性をほとんど含んでいない。「コボちゃん」の作品世界に首相が入り込む余地は極端に少なく、先行研究が「純家庭的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。²⁶

約3年2ヵ月ぶりに首相が登場したのが2011年11月12日号（No.10503、図9）の作品であるが、政治的な含意は見いだせず、いつもの「コボちゃん」らしい内容である。冒頭で「T P P…総理の決断」（1コマ）とテレビが伝えているが、これはあくまで家庭内の些事^{ささい}につなげるためのきっかけにすぎず、2コマ目以降、作品の焦点は「PTAの役員」（4コマ）を引き受けるか悩む早苗に移っている。過去に小泉・福田を描いた2本とまったく同様に、政治的な批評性・風刺性はほとんど含んでおらず、家庭内の小さな出来事に終始している。なお、就任直後から野田はT P P（環太平洋経済連携協定）に意欲を示しつづけ、民主党内を含めて強い反対論・慎重論が示されるなか、11月11日には交渉参加にむけて関係国と協議に入るという政治的決断を下していた。

このように、ごくまれに首相を描いても、政治性がほぼ皆無な家庭的な文脈でしか登場させないところに、先行研究がいう「コボちゃん」の「純家庭的」な特徴をあらためて確認することができる。「総理」が登場するのは1コマ目のみ、しかもテレビの報道内容を説明するために文字として周位的・付属的に描かれるだけである。そしてそれ以降、話題の中心は首相の経済政策からまったくかけ離れ、家庭内の些細な出来事に切り替わってしまう。「総理」はコボの家族に小さな話題を提供する

コボちゃん
植田ましろ 10503



図9 2011年11月12日号（No.10503）

きっかけにすぎず、この作品から首相、あるいは首相が直面している政治的課題に対する何らかの批評性・風刺性を看取することはできない。

やや一考を要するのは、図9で首相が描かれたことを、先行研究が示している家庭漫画の首相描写に関する仮説で合理的に説明できるか、という問題である。本論文の中編-1でも参照したその仮説をあらためて確認しておく、「コボちゃん」のような家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定される」というものである。

掲載当時の社会的状況を考えると、小泉・福田を描いた2本とはやや性質が異なるかもしれないが、同仮説で十分に合理的な説明ができると考えられる。確かに、T P Pのような多国間の経済政策交渉は、そのきわめて複雑かつ茫洋とした性質から、一般的には「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼる」問題とはいいいく。しかし、その具体像の見えにくさゆえに、日本のT P P参加に強く反対する勢力や慎重派も多く、交渉参加をめぐる賛否両論はテレビなどマス・メディアでさかんに報道されていた。とくに図9の掲載日の前日（11月11日）には、ついに野田がT P P交渉参加にむけて関係国と協議に入ることを正式に表明しており、その政治的決断に注目が集まっていた時期とかさなる。難解な政策が題材とされている点で、高い人気を背景に首相に就任した小泉、突然の辞任表明をした福田を描いた2本とはやや異なるが、図9も先行研究が示した仮説で十分に合理的な説明が可能である。²⁷

上述の点を補強する事実として、必ずしも首相を描いているわけではないが、同じく「純家庭的」な「ウチの場合は」、そして時事的な「アサッテ君」や「地球防衛家のヒトビト」にもT P Pを題材とする作品が複数ある。このことは、T P Pが社会的に大きな話題となっており、その詳細はともかく、広く一般庶民の関心を集める争点であったことを示している。参考までに、2011年11月中旬に読売新聞社が実施した「農業」に関する全国世論調査（個別訪問面接聴取法）では、日本がT P Pに「参加すべきだ」は41%、「参加すべきでない」は37%、「答えない」は21%という結果であり、いかに社会を二分していたかがわかる。²⁸

図9について最後に、ここでもテレビで報道される対象として首相が描かれている点を無視することはできない。本論文の中編-1で「アサッテ君」の作品分析をした際に論じたように、かつ先行研究もくり返し指摘しているように、新聞4コマ漫画では多くの場合、一般庶民である登場人物たちがマス・メディアを媒介して首相を見知る・語る構図が用いられる。「コボちゃん」は野田以前に小泉・福田を1度ずつ作品化しているが、いずれの場合も1コマ目で主人公一家がテレビを通じて首相の言動に接している。さらに付言すると、「アサッテ君」など他の漫画では新聞・雑誌も使われているのに対し、現在のところ「コボちゃん」で首相に関する情報源になっているのはテレビに限られる。家庭的な性質が顕著であることに加え、子供が主人公である点が関係しているかもしれない。

次に、「首相を描いている作品」の定義にはあてはまらないが、本論文の趣旨に照らして扱うべき作品が複数あるので、以下で簡潔な内容紹介と若干の分析をおこなう。

まず、2011年8月31日号（No.10432、**図10**）の作品は、就任する以前の野田を「新しい首相」として文字で描いている点で重要である。酒場で他の客と孫談義をする祖父・山川岩男が、「新しい首相は…」（3コマ）と相手が話題を変えるまで孫自慢をしつづける、という内容である。なお、野田はこの2日前の民主党代表選（8月29日）で決選投票のすえに当選し、この作品が掲載された時点では「次期」首相に就任することが確定していた。

もっとも、**図10**の主題はあくまで「孫をかわいがる祖父」であり、これまで論じてきたような「純家庭的」な作風を踏襲した作品であることは間違いない。酒場での会話に「首相」は登場するが、それは相手が話題を変えるまで孫自慢をしつづける岩男の愛情を表現するための状況設定にすぎず、「首相」でなければ作品が成立しないわけではない。政治家や政治問題とほぼ無縁である「コボちゃん」の作風の枠内に収まる内容である。

他方、それでもなお作中で「首相」という言葉が使われた事実は、先行研究が示した仮説を援用することで無理なく説明できる。つまり、約3ヵ月前の6月初旬から「一定のめど」をもって辞任することが論争的になっていた菅直人がついに退任し「新しい首相」が誕生することは、間違いなく「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道」されていた社会的重大関心事であり、それゆえに「純家庭的」な「コボちゃん」でも題材になったと考えられるからである。

図10ほどではないが、多少なりとも政治的な題材を扱っているという点で、衆議院総選挙（12月16日に執行）をテーマに取り入れた2本の作品についても簡単に触れておく。2012年12月12日号（No.10887、**図11**）と12月16日号（No.10891、**図12**）の作品である。

これらも「首相を描いている作品」ではないが、総選挙が題材とされていることは既述の仮説で説明がつく。この選挙では、3年前に華々しく政権交代をはたした民主党が大敗し、政権与党の座を自民党に明けわたす可能性が実施前から予見され、マス・メディアが大きく報道



図10 2011年8月31日号（No.10432）

コボちゃん
植田まし 10887



図11 2012年12月12日号 (No.10887)

コボちゃん
植田まし 10891



図12 2012年12月16日号 (No.10891)

したことはもちろん、社会的関心も集めていたからである。もちろん、政治的な批評性・風刺性がほとんど発揮されておらず、「コボちゃん」らしい「純家庭的」な展開であることは他の作品と変わらない。

ただし、先行研究によれば、「コボちゃん」では首相が作品に登場することはほとんどないもの

の、かといって政治家や政治の話題がまったくのぼらないわけでもない。たとえば、自民党の麻生太郎の在任期間中には、登場人物たちはしばしば、民主党が躍進した東京都議会選挙や政権交代を実現せしめた衆議院総選挙など社会で大きな関心を集めた政治的な問題や出来事について語りあい、さらにはそれに参加している。加えて、1本だけではあるが、民主党による政権交代に対する政治風刺が認められる作品さえあった。菅の在任期間中にも、「新しい首相」を扱った図10以外に、やや曖昧ではあるが日本の政情が「国民不在」で「ゴタゴタ」していると登場人物が語る作品が1本ある。²⁹

もちろん、図10・11・12はどれも本論文が定義する「首相を描いている作品」ではないため、仮説の蓋然性や「コボちゃん」の首相の描き方については、さらなる研究の積みあがが欠かせない。

・オフィス ケン太（唐沢なをき） 『読売新聞』（夕刊）

野田の在任期間中、2012年10月1日号から『読売新聞』の夕刊で連載を開始した「オフィス ケン太」（唐沢なをき）は、主役の子犬・ケン太を中心に飼い主の家庭や職場での出来事をコミカルに描く家庭的な4コマ漫画である。『読売新聞』の夕刊社会面に4コマ漫画が連載されるのは、小泉純一郎政権中の2004年7月2日号で「サンワリ君」（鈴木義司）が終了して以来、実に8年3ヵ月ぶりのことであった。その間、安倍・福田・麻生・鳩山・菅の5人の在任期間中には、『読売新聞』の夕刊で4コマ漫画は連載されなかった。2019年7月に2,000回を迎え、本論文執筆時点（2019年12月）でも2,100回を超えてなお継続中である。

「オフィス ケン太」の独自性の一つは、主役が「人間」ではなく「犬」だということである。ケン太は1歳の柴犬で、IT企業の社員のストレスを緩和する「オフィス犬」として飼われている。社員証を首に巻いているのはそれゆえである。作者によれば、ケン太は「のんきで生意気、気が弱くもある」という性格で、「世の中のことがよく分かっていないのに、分かったような口をきく、犬ならではのヘンテコな視点」をもっているという。「口をきく」とあるように、ケン太は特定の人間とは会話ができるし、できない場合でもケン太の「言葉」は吹きだしのなかで示される。ケン太以外にも「オフィス犬」は存在し、取引先で飼育されているチワワで「セレブ犬」のプリンスくんなども登場する。なお、本論文の分析対象ではないが、『東京新聞』（朝刊）などで2012年2月から2017年3月まで連載された「おい 栗之助」（森栗丸）も犬を中心に物語が展開する漫画である。³⁰

もちろん、ケン太をとりまく人間たちも重要な役割をはたす。とくに頻出するのは世話係である柴家の面々で、社員（役職は「コンパニオン・アニマル・マネジャー」）で父の柴マキオ、母で儉約家のシノ、一人娘で6歳のハチコの3人からなる。なかでもハチコは、ケン太と直接話ができるという特殊な能力をもつ。ケン太は平日にはマキオと一緒に会社に「出勤」し、週末は柴家で過ごす。³¹

作者の唐沢なをき（本名・唐沢直樹）は、「ギャグ漫画一筋」に多くの作品を発表している漫画家である。1961年に北海道で生まれた唐沢は、1985年に『無敵刑事^{デカ}』でデビューし、1998年には漫画を版画化した『怪奇版画男』（小学館、1998年）で第27回日本漫画家協会賞優秀賞、2000年には『脳膜炎』（小学館、1999年～2014年）で第46回文藝春秋漫画賞を受賞（本論文の後編で分析する予定の

「地球防衛家のヒトビト」の作者・しりあがり寿も同時受賞)している。その他の代表作として、『電脳なをさん』(アスキー、1998年)、『漫画家超残酷物語』(小学館、2005年)、などがある。特撮・怪獣好きとしても知られ、特撮テレビ番組を漫画化した『ウルトラファイト番外地』(角川書店、2005年)、各界の怪獣ファンとの対談集『怪獣王』(ぶんか社、1999年)などの著書、また兄で作家の唐沢俊一との共著も数冊ある。

野田の在任期間中、「オフィス ケン太」が首相を描くことは1度もなかった(71本中0本)。既述のとおり、連載がはじまったのは野田の首相就任後であるため、他の4コマ漫画のように歴代の首相と比較することはできない。

そのため判断材料は相対的に少ないが、首相が1度も描かれていない事実を含めて作品総体を見わたすと、「オフィス ケン太」は家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わない「純家庭的4コマ漫画」と位置づけられる。『毎日新聞』(夕刊)の「ウチの場合は」(376本中0本)、『読売新聞』(朝刊)の「コボちゃん」(468本中1本)と同じ分類である。先行研究が指摘しているように、また後述するように、『朝日新聞』(朝刊)の「ののちゃん」(468本中0本)にも類似した家庭的な特徴が見られる。

実際、作者の唐沢は、老若男女に理解できる「笑い」「楽しさ」を重視する姿勢をくり返し表明している。連載開始時には『『ギャグ漫画家』と呼ばれるのが一番の誇り』であると語り、2019年7月に2,000回を迎えた際にも、「マニアックにならず子供でも分かる笑い」を意識し、「とにかく頑張って、世の中に嫌なことがあっても『ケン太』の中だけは楽しい世界にしていきたい」とのべている。³²

ただし、他の家庭漫画にもいえることであるが、時事性や政治的な批評・風刺性を完全に排除しているというわけでもない。この点について作者は、連載開始にあたり次のように抱負をのべている。

これまでパソコンや特撮ヒーローといった比較的狭い世界を描いてきましたが、「オフィス ケン太」ではもっと広い視野で、世の中の全てが笑いのネタとなる漫画に挑戦したい。シンプルな笑いも、ほのほのした笑いも、社会風刺もある。目指すは、お買い得感のある漫画の幕の内弁当です。

「世の中の全て」を「広い視野」で見わたし、場合によっては「社会風刺もある」というのである。³³

基軸となるのは庶民的な「笑い」「楽しさ」ではあるが、他の家庭的漫画と同様、今後、少ないながらも首相を作品化する可能性は十分にある。野田の後任者で自民党の安倍(第2次)、そしてそれ以降の首相についても継続的に分析していく必要がある。

実際、野田の在任期間中に掲載された71本のなかにも、広く政治・政治家を題材としている作品が複数ある。いずれも衆議院の解散、それにとまなう総選挙を扱ったもので、今後の研究につなげるためにも、以下で簡潔に紹介・分析しておく。

オフィスケン太

45 唐沢なをき NAWOKI KARASAWA



図13 2012年11月24日号 (No.45)

まず、2012年11月24日号 (No.45、図13) の作品は、衆議院の解散 (11月16日) を題材に含みながら、職場での滑稽なエピソードを中核とする「純家庭的」な内容であるといえる。まず、冒頭でマキオと会社の同僚が、「解散しましたねー衆議院」「来月選挙かーさわがしくなるなー」(1コマ) と話している。しかし、政治談義はそれ以上発展せず、作品の焦点は学校が投票所となることを喜ぶ別の同僚の過剰なはしゃぎぶりに移っている。解散、あるいは総選挙が話題となっはいるが、それが主題というわけではなく、子供っぽく興奮する主人公の職場の社員を描くことを主眼とする、すぐれて家庭的な作品である。

ひきつづき総選挙を題材としているのが2012年12月14日号 (No.62、図14) と12月15日号 (No.63、図15) の2本であるが、これらも図13と同様に家庭漫画らしい展開を見せている。まず、図14では自転車に乗って選挙活動をする候補者が、張り切り過ぎて川に転落し、なおも泳ぎつづけながら街頭宣伝をする、という内容である。図15ではケン太やハチコらが洋服軍筒のなかに入って「選挙掲示板ごっこ」(4コマ) をしている。いずれの作品からも、選挙や特定の候補者に対する政治的な含意は読みとれず、「純家庭的」な作風だといえる。

上述の3本はいずれも「首相を描いた作品」ではないが、解散・総選挙という政治イベントを題材としていることについては、先行研究が提示している仮説を援用すれば一定の説明がつく。その仮説とは、「オフィスケン太」のような家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言

動が社会で注目され、大きなニュースとして (とくにテレビなどマス・メディアで) 報道されている場合にほぼ限定される」というものである。まず、衆議院の解散 (11月16日) は、同年8月8日に野田が消費税増税関連法案の成立後「近いうち」に実施すると明言していたため報道対象でありつづけ、かつ社会的な注目も集めていた。当然、解散に付随する総選挙も、政権与党・首相を決定づける国家的行事として社会の重大な関心事であった。「純家庭的」な「オフィスケン太」で題材となった理由を考える上で、十分に合理的な説明が可能である。



図14 2012年12月14日号 (No.62)



図15 2012年12月15日号 (No.63)

以上の分析から、今後もし「オフィス ケン太」に首相が登場するとしても、他の家庭漫画と同じように政治的な批評・風刺性は希薄で、主眼はあくまで登場人物たちの日常的な生活ぶりに置かれるだろうと予想できる。いずれにせよ、今後、「オフィス ケン太」がいかなる作品で首相など政治家や政治問題を描くのかを注視しつづけ、少しでも参考になる事例を積みあげていく必要がある。

・ののちゃん（いしいひさいち） 『朝日新聞』（朝刊）

『朝日新聞』の朝刊で連載されている「ののちゃん」（いしいひさいち）は、主人公・山田のの子の家族を中心として、家庭や学校における彼らの日常生活を描く家庭的な4コマ漫画である。山田家は5人家族で、会社員の父親・たかし、専業主婦の母親・まつ子、中学生の長男・のぼる、小学3年生の長女・のの子、祖母・山野しげ、からなる。無愛想で散歩嫌いの飼い犬・ポチもいる。2009年の作者のインタビューによると、漫画の舞台は自身の出身地である岡山県玉野市をモデルにした「たまのの市」であるという。³⁴

「ののちゃん」は、その前身「となりのやまだ君」を改題した漫画で、本論文執筆時点（2019年12月）でも7,900回を超えてなお継続中である。「となりのやまだ君」は1991年10月から1,935回の連載をかさね、1997年4月に「ののちゃん」に改題された。「となりのやまだ君」を含めれば、連載は28年、9,800回を超える。その間、新聞以外の媒体にも進出し、1999年7月には「ホーホケキョ となりの山田くん」として映画でアニメ化、2001年7月から2002年9月にかけてはテレビでも「ののちゃん」のタイトルでアニメ化されている。³⁵

作者・いしいひさいち（本名・石井壽一）は、4コマ漫画を中心に多方面で活躍している漫画家で、「現代の4コマ漫画発展に大きな功績を残した一人」と評価する研究者もいるほどの第一人者である。1951年うまれのいしいは、関西大学で漫画同好会に所属し、デビュー作は在学中の1972年から求人情報誌『日刊アルバイトパートタイマー情報』に連載した「Oh! バイトくん」であった。1976年に大学を卒業後は次々にヒットを飛ばし、代表作として「がんばれ!! タブチくん!!」（『漫画アクション』）、「経済外論」（『朝日新聞』）、「コミカル・ミステリー・ツアー」（『ミステリーズ!』）などがある。受賞歴も多く、第31回文藝春秋漫画賞（1985年）、第32回日本漫画家協会賞大賞（2003年）、第54回菊池寛賞（2006年）、などがある。2003年には「ののちゃん」などで第7回手塚治虫文化賞短編賞を受賞している。³⁶

野田政権時の「ののちゃん」には、首相を描いた作品は1本もなかった（468本中0本）。本論文が分析対象とした他の新聞4コマ漫画では、『毎日新聞』夕刊の「ウチの場合は」（376本中0本）と『読売新聞』夕刊の「オフィス ケン太」（71本中0本）も首相を描いていない。

もっとも、先行研究（本論文前編・後注4参照）が指摘しているように、「ののちゃん」は「きわめて家庭色が強い漫画で、政治や政治家がほとんど登場しない」という特徴をもっているため、野田を描いた作品が存在しなかったことは驚くにはあたらない。過去の首相を見ると、5年5カ月の在任期間中、小泉純一郎を描いた作品は1,927本中わずか4本（0.20%）しかなかった。しかも、その4本のうち2本は「番外作品」（番号が付されていない作品）であった。安倍晋三・福田康夫・麻生太郎を描いた作品は皆無（安倍=354本中0本、福田=355本中0本、麻生=348本中0本）で、小泉以降の首相でもっとも「描かれやすい」鳩山由紀夫でさえも163本中1本（0.61%）にとどまっている。さらに、その後任者の菅直人も1度も描いていない（441本中0本）。つまり、小泉から野田までの11年8ヵ月間を通じて、本論文の定義に合致する方法で首相を描いた作品は5本（小泉=4本、鳩山=1

本) しかないわけである。「首相が登場することはめったにない」と先行研究が特徴づけているように、野田を描いた作品が1本もなかったことは、これまでの傾向に照らせば何ら不自然ではない。なお、小泉政権時にあった「番外作品」は、それ以降、野田の在任期間中まで1本も掲載されていない。³⁷

首相が1度も登場しないばかりか、野田政権時の「ののちゃん」には首相の存在をほのめかす作品さえ皆無であり、「純家庭的」な「ウチの場合は」「コボちゃん」「オフィス ケン太」よりもなお政治家や政治問題と無縁であった。本誌前号に掲載した中編-1で論じたように、「ウチの場合は」には在任期間「外」ではあるが野田を扱う作品(図6)があったし、「コボちゃん」は約3年2ヵ月ぶりに首相を描いている(図9)。「オフィス ケン太」にも衆議院の解散・総選挙を題材とする作品が3本(図13・14・15)あった。つまり、「純家庭的」と特徴づけられる他の漫画でさえ、多少なりとも首相や現実にある政治問題に触れているにもかかわらず、「ののちゃん」にはその影さえ見えないのである。

本論文が上述の点に着目するのは、作者のいしいが本来、政治を含む時事的な問題にまったく無関心な漫画家ではないからである。漫画研究者の山口佐栄子も指摘しているように、いしいが描いてきた4コマ漫画のテーマは「政治経済、時事問題から哲学まで、多岐にわたる」。先行研究も、数こそ少ないが小泉を描いた作品は「痛烈な政治風刺を効かせ、意図して批判的な文脈で首相を描いて」おり、かつ鳩山を描いた1本も「かなり辛辣な政治風刺を展開している」と分析し、そのために「ののちゃん」を「純家庭的4コマ漫画」ではなく、ごくまれに鋭い政治批評・風刺をすることもある「家庭的4コマ漫画」として特徴づけている。小泉政権以降、全国3大紙の4コマ漫画のなかで唯一「番外作品」を掲載している事実も、政治問題や現実社会で起きている出来事に作者が一定の注意を払っている証左と見ることができる。しかし、その特徴は野田の在任期間中にはまったく表出しなかった。むしろ、「純家庭的4コマ漫画」である「ウチの場合は」「コボちゃん」「オフィス ケン太」よりもさらに「純家庭的」であったとさえいえる。³⁸

もっとも、先行研究が指摘しているように、「ののちゃん」は「意図的に政治問題を避け、あえて家庭的な漫画に徹している」と考えられるため、本論文の知見だけをもって他の「純家庭的4コマ漫画」と同列に位置づけ直すのは早計である。作者のいしいは連載3,000回を迎えた際(2005年9月)に、「世の中がどうなろうと『しらんぷり』が『ののちゃん』の基本です」と語っている。また、2012年の著作に寄稿したインタビュー形式の自筆エッセーでも、「私にはニュース漫画家の側面があるのですが[『ののちゃん』では]これもヤセガマンしてやっていません」と書いている。これらの言葉を借りれば、それまでと同じく野田の在任期間中にも、「しらんぷり」「ヤセガマン」している作者をふりむかせるほどの出来事は起きなかったといえる。³⁹

意図的な非政治性についてさらに付言すれば、本論文執筆時点で、3大紙の4コマ漫画のなかで「ののちゃん」だけが2011年3月11日に発生した東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故を明確な形で作品に取りあげていない。発生当時はまだ連載を開始していなかった「オフィス ケン

太」でさえ、柴犬のケン太が「オイラの願いは日本経済の発展と被災地の復興」とのべる作品（2013年7月6日号）がある。「ののちゃん」の舞台が被災地から比較的に遠いと考えられる「たまの市」（岡山県玉野市がモデル）である事情を考慮しても、日本、いや世界全体を揺るがせた史上最大規模の災害・事故にさえ、少なくとも表面上はほとんど影響を受けていないことは注目に値する。

首相ばかりか大震災・原発事故さえ題材としていない点をかながみれば、やはり、「ののちゃん」は現実社会における出来事（とくに政治的な問題）を意識的に排除していると見るべきである。作者のいしいは2012年5月29日号の『朝日新聞』に掲載された寄稿でも、「『ののちゃん』では、あいかわらず適当な設定です」と書いている。この言葉からもわかるように、何が起きようとも「適当」に「しらんぷり」、あるいは「ヤセガマン」しつづけることこそが、むしろ他の新聞4コマ漫画と一線を画す「ののちゃん」の独自性だといえる。⁴⁰

上述の点に関連して、先行研究は一貫して「ののちゃん」を「純家庭的4コマ漫画」ではなく、ごくまれに鋭い政治批評・風刺をすることもある「家庭的4コマ漫画」と特徴づけてきたが、本論文でこの分類を変更する必要性は見いだせない。前身の「となりのやまだ君」から連載20年を迎えた際、作者は「新聞まんがだからこの程度がよいとか、いつも同じがよいとは考えません」と書いている。先行研究も指摘しているように、今後、「突然に政治風刺性を発揮して首相を描く可能性を『ののちゃん』はつねに内包している」と考えるべきである。⁴¹

とはいえ、「ののちゃん」の首相描写には未知の部分があまりにも多く残されており、さらなる研究の積みあげが不可欠であることはいうまでもない。数少ないとはいえ、小泉を描いた作品が4本、自民党から政権を奪った民主党の鳩山を描いた作品も1本ある。野田が率いる民主党から政権を奪い返した自民党の安倍（第2次）、さらにそれ以降、いしひの意図的な無関心を途切れさせる首相が出現するのかどうか、継続的に注視していく必要がある。⁴²

他方、先行研究が存在しない小泉以前の首相に分析の範囲を広げることも、突破口を開く有力な手段となりえる。そうすることで、「ののちゃん」の首相描写はもちろんのこと、先行研究が示す家庭的4コマ漫画の首相描写と社会的注目度に関する仮説についても、理論化にむけて有用な材料が得られるかもしれない。

注

23 作者自身や漫画の登場人物については、次に示す新聞記事が参考になる。「コボちゃん10000回」『読売新聞』2010年6月14日、「コボちゃん妹 『ミホ』ちゃんに」『読売新聞』2010年6月16日、佐藤憲一「気になる！コボちゃん来年は小学生」『読売新聞』2010年12月15日、「コボちゃん入学記念 ご両家夢の共演 ＊植田さん・けらさん対談」『読売新聞』2011年4月6日、「笑顔届け1万640回 コボちゃん きょう30周年」『読売新聞』2012年4月1日。

24 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、12。

25 「笑みコボれる28年」『読売新聞』2010年6月14日。

26 小泉と福田を描いたのは、それぞれ2001年4月27日号（No.6761）と2008年9月4日号（No.9371）の作品である。

- 27 小泉を描いた2001年4月27日号 (No.6761)、および福田を描いた2008年9月4日号 (No.9371) の作品の分析は、本論文前編・後注4で示した新庄・水野ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 (後編)」、および水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相 (中編)」でおこなっている。
- 28 「本社世論調査 農業再生 強い期待」『読売新聞』2011年11月20日。T P Pを題材とする他の4コマ漫画の作品として、「アサッテ君」では2011年10月23日号 (No.12673)、「ウチの場合は」では2011年10月26日号 (No.2707)、そして「地球防衛家のヒトビト」では2011年10月19日号、2011年10月21日号、2011年11月1日号の作品がある。
- 29 民主党による政権交代に対する風刺が込められていると考えられるのは、麻生の在任期間中に掲載された2009年9月4日号の作品 (No.9725) である。「政権が交代して日本はどれくらい変わりますかねー」と意見を求める耕二に、岩男が腕組みを変えながら「これくらいかな、つまり、大きな変化は望めないという旨の回答をしている。この作品の分析は、本論文前編・後注4で示した水野・福田ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相 (中編)」でおこなっている。

日本の政情が「国民不在」で「ゴタゴタ」していると表現しているのは2011年2月25日号 (No.10249) の作品で、次のような内容である。

- ・海外の反政府デモを伝えるテレビを見ながら、ミネが岩男に「日本でも起きるかしら」と尋ねる (1コマ)
- ・「多少の問題はあるけどおきないだろう」と答える岩男に対して、ミネが「そうね」「いまはちょっとゴタゴタしてるのと国民不在ぐらいですものね…」と冷静に応じる (2~3コマ)
- ・デモがおきていないか確かめに岩男が国会議事堂前まで出むく (4コマ)

テレビが伝えている「複数の国で反政府デモ」(1コマ)は、当時、中東や北アフリカ諸国で民主化を求める市民の反政府デモが頻発していたことをさしている。この作品の分析は、本論文前編・後注4で示した水野「新聞4コマ漫画が描く菅直人首相 (中編)」でおこなっている。

- 30 「新夕刊漫画『オフィス ケン太』 作者・唐沢なをきさん『ギャクの幕の内弁当目指します』」『読売新聞』2012年9月24日夕刊。
- 31 作者自身や漫画の登場人物については、「夕刊漫画8年ぶり オフィス ケン太」『読売新聞』2012年9月24日夕刊、「新夕刊漫画『オフィス ケン太』 作者・唐沢なをきさん『ギャクの幕の内弁当目指します』」『読売新聞』2012年9月24日夕刊、などが参考になる。
- 32 「新夕刊漫画『オフィス ケン太』 作者・唐沢なをきさん『ギャクの幕の内弁当目指します』」『読売新聞』2012年9月24日夕刊、佐藤憲一「オフィス ケン太 連載2000回 唐沢なをきさん」『読売新聞』2019年8月10日夕刊。
- 33 「新夕刊漫画『オフィス ケン太』 作者・唐沢なをきさん『ギャクの幕の内弁当目指します』」『読売新聞』2012年9月24日夕刊。
- 34 小川雪「行こうののちゃんの町へ」『朝日新聞』2009年5月5日。
- 35 「ののちゃん5000回へ 一家の日常 風刺の隠し味」『朝日新聞』2011年8月9日、「朝のクスッと20年」『朝日新聞』2011年10月12日。いしいの病気療養のため、2009年11月21日号の作品 (No.4882) を掲載後、「ののちゃん」は2010年2月いっぱいまで休載している。再開したのは同年3月1日号からである。
- 36 山口「4コマ漫画」、夏目・竹内編・著『マンガ学入門』12。いしいの著作歴については、山野博史「いしいひさいち著書目録」『関西大学年史紀要』第15号 (2004年3月): 1~52、いしいひさいちほか、新保信長・穴沢優子編『文藝別冊 [総特集] いしいひさいち 仁義なきお笑い』(河出書房新社、2012年)、が詳しい。
- 37 小泉・鳩山を描いた作品は、それぞれ、本論文前編・注4で示した新庄・水野ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 (後編)」、水野・福田「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相 (後編-2)」でおこなっている。
- 38 山口「4コマ漫画」、夏目・竹内編・著『マンガ学入門』13。
- 39 いしいひさいち「『しらんぷり』基本に」『朝日新聞』2005年9月20日、いしいひさいち「でっあげインタビュー いしいひさいちに聞く」、いしいほか、新保・穴沢編『文藝別冊 [総特集] いしいひさいち』22。
- 40 「漫画で読む名人戦」『朝日新聞』2012年5月29日。なお、前述したインタビュー形式の自筆エッセーでは、大震災をまったく取りあげなかった理由として、「そうした事態を描くにふさわしい漫画でないことと神戸の地震の反省がありました」と書いている。つづけて「神戸の地震の反省」について、「知人の安否を訪ねて」[マ

マ] 直後の神戸市内に入ったことで何本か描いてしまいましたが、そのお笑いが人の不幸をあざ笑いかねない
[ものだった。] ナンセンス漫画家を自称するなら沈黙すべきでした」と説明している。（いしい「でっちあげイ
ンタビュー いしいひさいちに聞く」、いしいほか、新保・穴沢編『文藝別冊 [総特集] いしいひさいち』24。）

41 「朝のクスッと20年 デッチあげインタビュー 第38回」『朝日新聞』2011年10月12日。

42 本論文執筆時点（2019年12月）で、安倍（第2次）を描いた作品は確認できていない。

【Abstract】

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 3):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major
National Newspapers in Japan 2011–2012

Takeya MIZUNO

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yoshihiko Noda during his tenure, from September 2, 2011 to December 26, 2012.

As the third installment of a multiple-part series, this article (Part 3) analyzes qualitatively how *Yomiuri*'s “Kobo Chan” (Kobo, the Li'l Rascal) and “Office Kenta” (Kenta, the Office Dog), and *Asahi*'s “Nono Chan” (Little Nono) depicted Prime Minister Noda.

In the later installments which are planned to appear in the upcoming issues, comic strips of *Asahi*'s “Chikyu Boei Ke no Hitobito” (The Earth-Saver Family) will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.